

- 3.8 まれに、VLAN に関連する内部処理の異常が原因で通信停止や AMF 離脱などが発生することがありましたが、これを修正しました。
- 3.9 `clear mac address-table` コマンドの `dynamic` オプションでダイナミックエントリーを削除しようとするに関連プロセスが再起動していましたが、これを修正しました。
- 3.10 VCS 構成において、OSPF の ASBR として動作する場合、グレースフルリスタート機能を使用することはできませんでしたが、本バージョンより使用できるようになりました。
- 3.11 マルチキャストパケットを受信中に、IGMP Report パケットとマルチキャストの UDP パケットを受信し続けていると `nsm` プロセスが異常終了することがありましたが、これを修正しました。
- 3.12 IGMP プロキシとして動作しているスイッチが Leave メッセージを上位ルーターへ転送した後、当該グループが削除されているにもかかわらず上位ルーターからの `GroupSpecificQuery` に対して Join メッセージを返してしまうことがありましたが、これを修正しました。
- 3.13 IGMP プロキシとして動作しているスイッチにおいて、グループが離脱した後に上位ルーター側の VLAN インターフェイスがダウンすると、最大で 260 秒の間離脱したグループがホスト側のポートに再登録できなくなることがありましたが、これを修正しました。
- 3.14 VCS と Ping ポーリングの併用時、VCS マスターのダウンによって監視対象機器への Ping が不通になる場合は、Ping ポーリングトリガーの `down` イベントが発生せず、トリガースクリプトが起動されませんでした。これを修正しました。
- 3.15 VCS メンバーの起動中に、他の VCS メンバーの再起動や電源断が発生した場合、一部の設定が有効にならない場合があります。機能改善により発生しなくなりました。
- 3.16 VCS 構成のレジリエンシーリンクにおいて、まれにマスターからのヘルスチェックパケットの送信が停止し、その後復旧しない場合があります。これを修正しました。
- 3.17 3 台以上の VCS 構成において、LDF 検出によりブロッキングポートが作成されている VCS メンバーで再起動が発生した場合、他の VCS メンバーで例外処理が発生することがありましたが、これを修正しました。
- 3.18 VCS マスター切り替え後にまれにカーネルリブートが発生することがありましたが、これを修正しました。

4 本バージョンでの制限事項

ファームウェアバージョン **5.4.3-3.17** には、以下の制限事項があります。

4.1 システム

参照 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「システム」

- 次の通常起動時にロードされる通常用ファームウェアのイメージファイルが USB メモリー上にある状態で VCS のスタックメンバーに加入し、そのファームウェアが VCS マスターのものと異なると、次の緊急起動時にロードされるバックアップ用ファームウェアのイメージファイルが、USB メモリーではなくフラッシュメモリーにあるものとして指定されてしまいます。
- 本製品は SD カードには対応していませんが、USB オートブート時に、SD カードに関するエラーメッセージがログに出力されます。これは表示のみの問題であり、動作には影響しません。
 - ・ `daemon.err awplus automount[2577]: failed to mount /mnt/card`
- `reboot/reload` コマンドで `stack-member` パラメーターを指定した場合、確認メッセージが表示されますが、ここで `Ctrl/Z` や `Ctrl/C` を入力した場合はその後 `Enter` キーを入力してください。`Ctrl/Z` や `Ctrl/C` を入力しただけではコマンドプロンプトに戻りません。
- USB メモリーを挿入したまま起動すると、LED が点灯・点滅しません。USB メモリーは起動後に挿入しなおしてください。
- `no ip domain-lookup` コマンドを実行する以前に、1 度でも `ntp server` コマンドの設定を行ってしまうと、`no ip domain-lookup` コマンドを実行したとしても DNS へ問い合わせを行ってしまいます。`trigger` コマンドで再起動時に `no ip domain-lookup` コマンドが `ntp server` コマンドより先に実行されるように設定することにより、`no ip domain-lookup` の機能が正常に動作します。
- AT-x510-28GTX、AT-x510-52GTX、AT-x510-28GSX において、環境温度が変化してもファンスピードが変化しません。

4.2 コマンドラインインターフェース (CLI)

参照 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「コマンドラインインターフェース」

- `edit` コマンドを使用すると、コンソールターミナルのサイズが自動で変更されてしまいます。
- 非特権 EXEC モードで `show log permanent` コマンドを実行した場、"%Permanent logging is not available on this device" のようなログが出力され、実行できません。

4.3 ファイル操作

参照 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「ファイル操作」

- ZMODEM で転送するファイルのサイズは 3MByte 以下にしてください。
- USB メモリーに空き容量がない状態で、`create autoboot` コマンドを実行するとエラーメッセージが表示され、その後別の USB メモリーを使用しようとする、正しくディレクトリーが読み取れません。エラーメッセージ出力後に別の USB メモリーを使う際

は、一度本体を再起動してから使用してください。同一の USB メモリーを使用するには問題ありません。

- cd コマンドにて USB メモリーを利用中に、USB メモリーを抜き、その後 USB メモリーを挿しなおすと、本製品が USB メモリーを認識しないことがあります。USB メモリーを抜く前には必ず、cd flash で USB メモリーの利用を中止してください。
- USB メモリーを取り外した時のメッセージが Enter キーを入力するまで表示されません。
- edit, mkdir, rmdir, show file, show file systems コマンドを使用して Apricorn 社の SecureUSB メモリー ASK-256-8GB/16GB/32GB 上のファイルにアクセスした場合、ASK-256-8GB/16GB/32GB 上のアクセス LED が点滅状態のままになることがあります。その場合は、「dir usb:/」のように、USB メモリーにアクセスする操作をもう一度行ってください。
- Apricorn 社の SecureUSB メモリー ASK-256-8GB/16GB/32GB 使用時、カレントディレクトリーが USB メモリー上にある間は、ASK-256-8GB/16GB/32GB 上のアクセス LED が点滅状態のままになりますが、動作上の問題はありません。また、カレントディレクトリーを USB メモリー以外に移動すると点滅状態は解除されます。
- Apricorn 社の SecureUSB メモリー ASK-256-8GB/16GB/32GB を装着している状態でシステムを再起動した場合、再起動時 SecureUSB メモリーの仕様によりロックがかかるため、再起動後に USB メモリーのセキュリティーを解除するための PIN コードを再度入力してください。
- 2GByte 以上のファイルに対して、copy, delete, move コマンドで操作することはできません。dir コマンドでファイルの存在を確認することは可能です。
- SCP サーバーとのファイルの送受信時、サーバーと通信できない場合でもエラーメッセージが表示されません。

4.4 ユーザー認証

参照 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「ユーザー認証」

- アクセスが許可されていないホスト / ユーザーから SSH でログインしようとした場合、コンソール上にデバッグメッセージが表示されます。
- tacacs-server timeout コマンドで設定できるタイムアウト値の最大は 190 秒です。
- CLI ログイン認証に TACACS+ を使用するとき、同時に使用できる仮想端末ポート (VTY) の数は 20 までとなります。また内部のユーザー認証データベースを使用するときは、同時に使用できる仮想端末ポート (VTY) の数は 33 までとなります。
- TACACS+ 認証を使用して VCS マスターにログイン後、他のスタックメンバーにリモートログインしている最中に、ほかの TACACS+ セッションが同じユーザー名、パスワードでログインすると、以下のメッセージが出力されます。
 - ・ You don't exist, go away!
- CLI ログイン認証に TACACS+ サーバーを利用、かつ、特権パスワード (enable password) を設定している環境において、TACACS+ サーバードアウンにより装置本体

のユーザー認証データベースで認証された権限 15 のローカルユーザーが enable コマンドを実行した場合、本来なら権限 15 のユーザーには要求されない特権パスワードの入力プロンプトが表示されます。その場合は任意の文字列を入力することで、特権 EXEC モードに移行できます。

- TACACS+ サーバーを利用したコマンドアカウンティング (aaa accounting commands) 有効時、end コマンドのログは TACACS+ サーバーに送信されません。
- TACACS+ サーバーを利用した CLI ログインのアカウンティングにおいて、SSH 経由でログインしたユーザーのログアウト時に Stop メッセージを送信しません。

4.5 RADIUS クライアント

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「RADIUS クライアント」


- ローカル RADIUS サーバーに登録していない RADIUS クライアント (NAS) から、RADIUS Access-Request パケットを受信した場合、show radius local-server statistics コマンドで表示される Unknown NAS のカウンターがカウントアップしません。
- radius-server host コマンドの retransmit パラメーター、または、radius-server retransmit コマンドで 0 を指定しても、初期値の 3 回再送を行います。

4.6 RADIUS サーバー

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「RADIUS サーバー」

- USB メモリーを利用してローカル CA の証明書をダウンロードする際、USB メモリーにすでに同じ名前前のローカル CA の証明書が入っていた場合、Overwrite usb:/rootca.cer? (y/n) と確認のメッセージが表示されますが、Y も N も入力できず、上書きできません。USB メモリーに入っているファイルを削除するか、ファイル名を変更してダウンロードを行ってください。
- server auth-port コマンドによりローカル RADIUS サーバーの認証用 UDP ポート番号を 63998 以上に設定しようとする、関連プロセスが再起動するログが出力されます。また、上記の UDP ポート番号を使用してポート認証を行うことができません。
- ローカル RADIUS サーバーと 2 ステップ認証は併用できません。
- ローカル RADIUS サーバーに登録するユーザー名の長さは 63 文字までにしてください。

4.7 ログ

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「ログ」

- 保存するメッセージの最大量が log size コマンドで設定した値と異なります。
- MSTP 有効時、多数のインターフェースが同時にアップまたはダウンし、ログメッセージが大量に発生した場合、すべてのログメッセージが Syslog サーバーに転送されない場合があります。

- ターミナルモニターを有効にした後、VCS のバックアップメンバーにリモートログインを行いながら USB メモリーを抜き差しすると、ターミナルモニターのログが正しく表示されません。
- no log buffered コマンドを入力してランタイムメモリー (RAM) へのログ出力を一度無効にした後、default log buffered コマンドを実行しても、ログ出力が再開しません。その場合は「log buffered」を実行することにより再開できます。
- 以下のログがコンソールに表示されないことがあります。
 - ・ Configuration update completed for portxxx
 - ・ Member x (xxxx.xxxx.xxxx) has become the Active Master
- 不揮発性メモリー (NVS) に出力するログメッセージのメッセージフィルターを追加した後、default log コマンドを使用して不揮発性メモリーのログ出力を初期値に戻しても、作成されたメッセージフィルターが削除されません。メッセージフィルターは、log(filter) コマンドを no 形式で実行するか、本体を再起動すると削除されます。
- (AT-x510-28GPX/AT-x510-52GPX のみ) 起動時において、電源ユニットに関するログが不自然なタイミングで表示されます。また、2つの電源ユニットがどちらも正しく動作しているにもかかわらず、一方についてのログしか表示されない場合があります。

4.8 トリガー

「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「トリガー」

トリガー設定時、script コマンドで指定したスクリプトファイルが存在しない場合、コンソールに出力されるメッセージ内のスクリプトファイルのパスが誤っています。

誤：
% Script /flash/script-3.scp does not exist. Please ensure it is created before

正：
% Script flash:/script-3.scp does not exist. Please ensure it is created before

また、スクリプトファイルが存在しないにもかかわらず前述のコマンドは入力できてしまうため、コンフィグに反映され、show trigger コマンドのスクリプト情報にもこのスクリプトファイルが表示されます。

4.9 LLDP

「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「LLDP」

- VCS 構成時、LLDP MIB の lldpPortConfigAdminStatus は未サポートです。
- トランクポートに LLDP を設定すると、show lldp neighbors interface コマンドで表示される LLDP 有効ポートが正しく表示されません。

4.10 SNMP

「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「SNMP」

- LACP を使用しトランクグループを作成した際、対向機器の SNMP マネージャーで linkDown トラップを受信できない場合があります。送信先ホストの設定をする際、通知メッセージの形式で informs を指定すると informs パケットが受信できます。
- VCS 構成のシャーンに GetNext Request を送信すると、SNMP が 「no such object」と応答することがあります。
- SNMP MIB で、ifHCInUcastPkts と ifHCOutUcastPkts の値が正しくありません。それぞれ、ユニキャストパケットの受信数と送信数を示すはずですが、ブロードキャスト / マルチキャストパケットもカウントされてしまいます。
- snmp-server enable trap コマンドは、省略せずに入力してください。省略した場合、実行できない、または、コンソールの表示が乱れることがあります。
- atFilev2FileViewerName を利用する場合は、ファイルシステム上に 112 文字以上のファイル名を持つファイルが存在しないことを確認してください。
- SNMP マネージャー上から機器の RMON エントリーを作成するとエラーが発生し、エントリーが作成されない場合があります。
- リンクアップ・リンクダウン時に標準 MIB でサポートする linkDown・linkUp trap と一緒に、プライベート MIB の atLinkDown・atLinkUp trap も送信されます。

4.11 sFlow

「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「sFlow」

- sflow collector コマンドで sflow の UDP ポートを設定したとき、コンフィグに反映されず、保存、再起動で初期設定に戻ってしまいます。再起動した場合は、再度設定してください。SNMP マネージャーから設定した場合も同様です。
- sFlow が有効なインターフェースで VLAN タグがついたパケットを受信したとき、ingress 方向のサンプリング情報に VLAN タグ情報が付与されません。
- sFlow MIB の sFlowFsReceiver と sFlowCpReceiver の値を変更後、初期値に戻すためには sFlow を無効にする必要があります。


4.12 NTP

「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「NTP」

- 実際には NTP サーバーと時刻同期が取れていない状態でも、show ntp associations コマンド上では同期済みと表示される場合があります。
- NTP を使用していると、以下のログが出力されますが、動作には問題ありません。
 - ・ frequency error 501 PPM exceeds tolerance 500 PPM


- NTP を設定していないときでも、NTP カウンターがカウントアップします。
- すでに NTP サーバーが設定されている状態で、別のサーバーに設定を変更した場合、一度設定を削除した後、新規に設定を追加してください。削除せずに変更した場合、正しく同期しない場合があります。
- 初期設定時など、NTP を設定していない状態で show ntp status コマンドを入力すると、NTP サーバーと同期していることを示す以下のようなメッセージが表示されます。
 - ・ Clock is synchronized, stratum 0, actual frequency is 0.000PPM, precision is 2
- show ntp association detail コマンドの org time および xmt time の表示が、NTP による同期の有無にかかわらず、「06:28:16.000 UTC Thu Feb 7 2036」を示します。これは表示だけの問題で、システムの時計の動作には影響しません。
- NTPv4 を使用している場合、ntp master コマンドによる NTP 階層レベル (Stratum) の設定と NTP サーバーによる時刻の取得を併用すると、NTP サーバーによって自動決定される階層レベルが優先されます。
- DNS サーバーを複数登録 (ip name-server) している場合、NTP サーバーの追加コマンド (ntp server) を実行すると、プロンプトが戻るまで 1 分以上かかる場合があります。
- NTP サーバーと同期されているにもかかわらず、VCS スレーブ側の show log コマンド結果に、同期が取れていないことを表す以下のエラーメッセージが出力されることがあります。
ntpd_intres[4295]: host name not found:

4.13 端末設定

 **「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「端末設定」**

- clear line console コマンドを実行すると、他の VCS メンバー上のコンソールで接続しているユーザーのセッションも切断されます。
- コンソールターミナルおよび仮想端末における 1 画面当たり表示行数は、実際のコンソールターミナルや仮想端末に表示できる行数より小さい値に設定してください。

4.14 Telnet

 **「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「Telnet」**


- 本製品から他の機器に Telnet で接続しているとき、次のようなメッセージが表示されません。
 - ・ No entry for terminal type "network";
 - ・ using vt100 terminal settings.
- 非特権モードでホスト名を使用して、Telnet 経由でリモートデバイスにログインする場合は、ドメイン名まで指定してください。

4.15 インターフェース

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」


- show interface コマンドで表示される dropped カウンターがカウントされません。show platform port counters コマンドの ifInDiscards カウンターで確認してください。
- IPv6 アドレスを持つインターフェースに show interface コマンドを入力した際の結果に、実際のホップリミットの値が表示されません。

4.16 フローコントロール

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」 / 「スイッチポート」


- 10G ポートでは、show flowcontrol interface コマンドの RxPause カウンターが正しく表示されません。
- 通信速度をオートネゴシエーションで決定しているとき、show flowcontrol interface コマンドで確認できる oper の状態が on になると、そのポートがリンクダウンした後も、表示が更新されません。これは表示のみの問題であり、動作に影響はありません。
- フローコントロールとバックプレッシャーを同一ポートに設定し、フローコントロールを無効にすると、バックプレッシャーが動作しなくなります。フローコントロールとバックプレッシャーを同一ポートに設定しないでください。

4.17 ポートセキュリティ

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」 / 「スイッチポート」


- ジャンボフレームはポートセキュリティの対象になりません。
- ポートセキュリティによって学習された MAC アドレスをエージアウトしないよう設定し、ポートセキュリティの不正パケット受信時の動作を指定している場合、ポートセキュリティを無効にしてもスタティック MAC アドレスがコンフィグに残ったままになります。コンフィグに残ってしまったスタティック MAC アドレスは、no mac address-table static または、clear mac address-table コマンドで削除してください。
- ポートセキュリティにおいて、不正パケット受信時の動作を shutdown に設定している状態で、ポートセキュリティを無効にすると、ログが正しく出力されず、show interface status コマンドでインターフェースのステータスが正しく表示されません。shutdown コマンドでインターフェースを無効にし、その後有効にすることで正しく表示されます。

4.18 パケットストームプロテクション

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」 / 「スイッチポート」

リンク速度の異なるポートが混在する環境において、高速なポートにパケットストームプロテクションの設定を行った場合、高速なポートから低速なポートへの転送レートは、パケットストームプロテクションの設定値よりも低くなります。


4.19 ループガード

 **参照**「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」 / 「スイッチポート」

- LDF 検出機能により、ループを検出した VLAN のポートが無効化されている場合、`switchport enable vlan` コマンドを VID を指定せずに実行しても、無効化されている VLAN のポートは有効になりません。LDF 検出機能により無効化されている VLAN のポートを有効にするには、`switchport enable vlan` コマンドを VID を指定して実行してください。
- LDF 送信間隔 (`loop-protection` コマンドの `ldf-interval` パラメーター) を最小値の 1 秒に設定する場合、ループ検出時の動作持続時間 (`loop-protection timeout` コマンド) は 2 秒以上に設定してください (初期値は 7 秒)。
- 本来、LDF 機能はアクセスリストのエントリーに空きがない場合には使用できませんが、アクセスリストのエントリーに空きがない場合でも、`loop-protection loop-detect` コマンドを 1 回入力し、エラーメッセージが表示された後に、再度同じコマンドを入力すると、コマンドが実行されてしまいます。
また、`loop-protection loop-detect` コマンドを 1 回入力し、エラーメッセージが表示された後に、当該のポートからアクセスリストのエントリーを削除すると、アクセスリストの登録数と最大数が正しく表示されなくなります。
- MAC アドレススラッシング検出時の動作に `learn-disable` アクションを設定しているとき、MAC アドレススラッシング検出後、MAC アドレスの学習が停止されないことがあります。
- MAC アドレススラッシングプロテクション設定時、ループを検出したすべてのポートが、設定した動作を行います。
- MAC アドレススラッシングプロテクションにおいて、`vlan-disable`、`link-down` アクション実行時のログメッセージに誤りがありますので、下記のとおり読み替えてください。
[`vlan-disable` の場合]
誤 : Thrash: Loop Protection has disabled "port" on ifindex XXXX vlan X
正 : Thrash: Loop Protection has disabled "VLAN" on ifindex XXXX vlan X

[`link-down` の場合]
誤 : Thrash: Loop Protection has disabled "port" on ifindex XXXX
正 : Thrash: Loop Protection has disabled "port-link" on ifindex XXXX
- タグ付きポートで LDF 検出の `vlan-disable` アクション (初期値) を使用する場合は、該当ポートのネイティブ VLAN をなしに設定してください (`switchport trunk native vlan none`)。

4.20 ポートミラーリング


 **参照**「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」 / 「スイッチポート」

- 複数ポートにインターフェースモードのコマンドを発行するときは、`interface` コマンドで対象ポートを指定するときに、通常ポートとして使用できないミラーポートを含めな

いようにしてください。ミラーポートを含めた場合、一部のポートに設定が反映されなかったり、エラーメッセージが重複して表示されたりすることがあります。

- ミラーポートとして設定されたポートは、どの VLAN にも属していない状態となりますが、`mirror interface none` で、ポートのミラー設定を解除し VLAN に所属させても `dot1qVlanStaticTable (1.3.6.1.2.1.17.7.1.4.3)` にポート情報が当該 VLAN に表示されません。ポートに `mirror interface` コマンドでソースポートのインターフェースとトラフィックの向きを設定した後、設定を外すとポート情報が正しく表示されるようになります。

4.21 リンクアグリゲーション (IEEE 802.3ad)

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」 / 「リンクアグリゲーション」

- ポート認証と LACP を同一ポートで併用することはできません。認証ポートではスタティックチャンネルグループ（手動設定のトランクグループ）を設定するようにしてください。
- スタティックチャンネルグループの対向機器の先に SNMP マネージャーが接続されている場合、スタティックチャンネルグループのメンバーポートをリンクアップした際、対向機器のリンクアップトラップが SNMP マネージャーに送信されないことがあります。
- トランクグループ（saX, poX）に対して `egress-rate-limit` コマンドを実行した場合、送信レート上限値はトランクグループ全体に対してではなく、メンバーポート単位で適用されます。またこのとき、ランニングコンフィグ上でもトランクグループではなくメンバーポートに対する設定に変換されます（CLI からメンバーポートに対して同コマンドを実行するとエラーになりますが、スタートアップコンフィグから読み込んだときはエラーになりません）。
- スタティックチャンネルグループ（手動設定のトランクグループ）において、`shutdown` コマンドによって無効にしていたポートに対して `no shutdown` コマンドを入力しても、ポートが有効にならないことがあります。この場合は、再度 `shutdown` コマンド、`no shutdown` コマンドを入力してください。
- スタティックチャンネルグループのインターフェースを `shutdown` コマンドにより無効に設定した後、リンクアップしているポートをそのスタティックチャンネルグループに追加すると、該当するインターフェースが再び有効になります。
- マルチキャストパケットの受信中に LACP チャンネルグループのメンバーポートをリンクダウンさせると次のようなログメッセージが出力されますが、動作には影響ありません。
 - ・ `user.err localhost HSL[480]: HSL: ERROR: Can't find multicast FDB entry`
- `show interface` コマンドで表示される poX インターフェース（LACP チャンネルグループ）の `input packets` 欄と `output packets` 欄の値には、リンクダウンしているメンバーポートの値が含まれません。LACP チャンネルグループ全体の正確な値を確認するには、poX インターフェースではなく各メンバーポートのカウンターを参照してください。

- LACP ポート上にエンハンストプライベート VLAN のセカンダリーポートを設定することは未サポートとなります。
- リンクアグリゲーションを設定した状態で、[no] mac address-table acquire コマンドを実行すると、不要なログメッセージが出力されますが、MAC アドレステーブルの自動学習機能には影響ありません。

4.22 ポート認証


参照 「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」 / 「ポート認証」

- EAP 透過機能で forward (受信した EAPOL パケットを VLAN に関係なくすべてのポートに転送する) に設定した場合、ポートミラーリングのソースポートからコピーされた EAPOL パケットとは別にミラーポートへ EAPOL パケットが転送されます。
- dot1x port-control コマンドでポート認証を有効にしたときに自動的に入る dot1x control-direction の設定が no dot1x control-direction で削除できません。コンフィグ上から dot1x control-direction コマンドを削除する場合は、no dot1x port-control を使用してください。また、ポート認証が無効にも関わらずポートに dot1x control-direction の設定が残っている場合も no dot1x port-control で削除してください。
- Supplicant の再認証間隔 (reAuthPeriod) の初期値は 3600 秒ですが、2 回目の再送間隔は約 1800 秒と前回の再送間隔の約半分になります。一定間隔で再送する場合は、auth timeout reauth-period コマンドで初期値以外の値を設定してください。
- VCS とリンクアグリゲーション併用時、トランクポートで認証を行った後、Supplicant 宛てのパケットを VCS のスレーブで受信すると不必要なログメッセージが出力されます。
- ローミング認証有効時、同時に多数の Supplicant のポート移動を行うと、再認証が発生する場合があります。
- スタティックチャンネルグループ内にゲスト VLAN に所属している Supplicant がいると、そのトランクポートのコンフィグに switchport access vlan の設定が追加されてしまいます。チャンネルグループを削除しても switchport access vlan の設定は残るので、先に switchport access vlan の設定を削除してからチャンネルグループを削除してください。
- 802.1X 認証の Supplicant がログオフしても、ステータスが Connecting になりません。
- Web 認証において、一度プロミスキャスモードに設定すると、その後インターセプトモードに変更しても、プロミスキャスモード設定時と同様に、動作します。インターセプトモードに設定を変更後、コンフィグを保存し、再起動した場合は、インターセプトモードとして動作します。
- 802.1X 認証において、認証を 3 台以上の RADIUS サーバーにて行う場合、はじめの 2 台の RADIUS サーバーにて認証に失敗した際、Authenticator から 3 台目の RADIUS サーバーに Access-Request が送信されません。

- 認証済みポートが認証を解除されても、マルチキャストトラフィックが該当ポートに転送され続ける場合があります。
- バージョン **5.4.3-2.5** より前のファームウェアにおいて、一度でも Web 認証サーバー (HTTPS) 用の独自 SSL 証明書をインストール (copy xxxxx web-auth-https-file) したことがある場合、独自証明書を削除して、Web 認証サーバーにシステム付属の証明書を使わせるには、次の手順を実行してください。
 1. 独自にインストールした SSL 証明書を削除する。
awplus# erase web-auth-https-file
 2. HTTP サービスを再起動する。
awplus(config)# no service http
awplus(config)# service httpまたはシステムを再起動する (* 未保存の設定がある場合は再起動前に保存してください)。
awplus# reboot
- Single-Host モードの 802.1X 認証ポートに auth supplicant-mac コマンドを設定する場合は、該当ポートに複数の Supplicant を接続しないでください。
- MAC ベース認証と Web 認証の 2 ステップ認証を利用する際は、認証スイッチと RADIUS サーバーとの間で使用する認証方式を、それぞれ別の方式に設定してください。
- 認証ポートが MAC 認証、Web 認証を併用しており、かつ直接サブリカントの Linkup/Down を検知しない環境にて、一度 Web 認証に失敗した後、サブリカントが DHCP の再取得を実施すると、その後 MAC 認証が実施されません。
- 802.1X 認証と Web 認証の 2 ステップ認証機能利用時に、ローカル RADIUS サーバーは使用できません。また、2 ステップ認証でローカル RADIUS サーバー以外の RADIUS サーバーを使用するときは、認証スイッチと RADIUS サーバーとの間で使用する認証方式を、802.1X 認証と Web 認証でそれぞれ別の方式に設定してください。
- Web 認証と MAC ベース認証 /802.1X 認証の併用時に、プロミスキャスモードとダイナミック VLAN を使用する場合は、Supplicant のデフォルトゲートウェイとして本製品 (Authenticator) を指定しないでください。
- VCS とダイナミック VLAN を併用している際、マスター切り替えが二回発生すると show auth-mac コマンドで表示される VLAN ID が VCS マスターと VCS スレーブで異なった値になります。これは表示だけの問題であり、動作には影響ありません。
- 同一ポート上でポート認証、マルチプルダイナミック VLAN、リンクアグリゲーション (ポートトランッキング)、DHCP リレーエージェント機能を併用することはできません。
- MAC 認証とダイナミック VLAN を併用した際、通信中に FDB のクリアを伴う再認証が発生すると、Supplicant が認証されず通信が切断されることがあります。


- Web 認証を使用している環境では、TCP の 80 番ポートが開いたままになり、アクセスリストなどを使用しても通信を破棄することはできません。
- MAC 認証とダイナミック VLAN を併用した際、通信中に FDB のクリアを伴う再認証が発生すると、Supplicant が認証されず通信が切断されることがあります。

4.23 Power over Ethernet (AT-x510-28GPX、AT-x510-52GPX、AT-IX5-28GPX のみ)

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「インターフェース」 / 「Power over Ethernet」

- PoE に対応した機器 (AT-x510-28GPX, AT-x510-52GPX) と PoE に対応していない機器 (AT-x510-28GTX, AT-x510-52GTX, AT-x510-28GSX, AT-x510DP-52GTX) が混在した VCS 環境において、power-inline enable コマンドを入力すると、PoE に対応していない機器に対するエラーメッセージが表示されますが、一部の非 PoE ポートの分しか表示されません。
- power-inline enable コマンドを no 形式で実行し、PoE 給電機能を無効に設定すると、本来、show power-inline コマンドの Oper の表示が「Disabled」と表示されるべきですが、受電機器が接続されたポートでは「Off」と表示されます。
- PoE 電源の電力使用量が最大供給電力を上回った場合、show power-inline interface detail コマンドの Detection Status は「Denied」と表示されるべきですが、「Off」と表示されてしまいます。同様に、ポートの出力電力が上限値を上回った場合、「Fault」と表示されるべきですが、「Off」と表示されてしまいます。
- ポートの出力電力が上限値を上回った状態で数分間放置すると、実際に接続している受電機器の電力クラスと異なる電力クラスが表示される、または「n/a」と表示されることがあります。また、これに伴って Max も実際とは異なる値が表示されます。ポートの出力電力が上限値未満に戻ると、表示も回復します。
- ポートの出力電力が上限値を上回った状態のとき、show power-inline の Oper の表示が、実際の「Fault (ポートの出力電力が上限値を上回ったために給電を停止している)」ではなく「Denied (PoE 電源の電力使用量が最大供給電力を上回ったために給電を停止している)」となることがあります。
- (AT-IX5-28GPX のみ) プリスタンダード方式の受電機器を接続した場合、ポートがリンクアップしないことがあります。ポートがリンクアップしないときは、ケーブルの抜き差しを行ってください。

4.24 バーチャル LAN

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「L2 スイッチング」 / 「バーチャル LAN」

- vlan コマンドは数値とカンマ、ハイフンだけを受け付ける仕様ですが、指定値にこれら以外の文字が含まれていてもエラーになりません。このとき、意図した VLAN が作成されなかったり (例: 「10,20」 のつもりで 「10,20」 と誤入力すると 「10」 しか作成されない)、意図したのとは異なる VLAN が作成されたりする (例: 「1001」 のつもりで 「100q」 と誤入力すると 「100」 が作成される) 場合がありますのでご注意ください。


- 大量に VLAN を作成後、switchport trunk allowed vlan コマンドを except オプション付きで指定しトランクポートの設定を行うと、再起動することがあります。switchport trunk allowed vlan コマンドを except オプション付きで指定するときには、VLAN 数を 700 以内にしてください。または、except オプションではなく、add または、all オプションを設定してください。
- プライベート VLAN からプライマリー VLAN を削除する場合は、事前にプライマリー VLAN、セカンダリー VLAN とともに、プライベート VLAN の関連付けを解除してください。その後、プライマリー VLAN のみを削除、再作成し、改めてプライベート VLAN とプライマリー VLAN、セカンダリー VLAN の関連付けを行ってください。
- エンハンスドプライベート VLAN を設定したポートからプライベート VLAN 用ポートとしての設定を削除すると、該当のポートでパケットが転送できなくなります。プライベート VLAN 用ポートとしての設定を削除した後は、本製品を再起動してください。
- ダブルタグ VLAN のプロバイダーポートをミラーリングした場合、platform vlan-stacking-tpid コマンドの設定にかかわらず、TPID は常に 8100 となります。
- プライベート VLAN のプロミスキャスポートに手動設定のトランクグループ（スタティックチャンネルグループ）を設定した場合、再起動後、ホストポートへパケットが転送されません。再起動後、プロミスキャスポートの設定を再入力すると、パケットが正常に転送されるようになります。
- プライベート VLAN 設定時にアップリンク側のマッピングを複数設定した場合は、設定を保存して再起動を行ってください。
- 1 ポートに適用できる VLAN クラシファイアグループは 2 グループです。1 ポートに 3 グループ以上適用した場合、設定順に反映されません。
- 同じ VLAN クラシファイアグループ内に複数のルールを定義した場合、設定順ではなく番号順に反映されます。
- マルチプル VLAN（プライベート VLAN）を CLI から設定した場合、コマンドの入力順序によってはプロミスキャスポート・ホストポート間の通信ができなくなる場合があります。その場合は、設定を保存してから再起動してください。

4.25 GVRP

参照「コマンドリファレンス」 / 「L2 スイッチング」 / 「GVRP」


- 学習する VLAN 情報が多い場合、GVRP を設定しているポートをダウンさせ、その後すぐにアップさせると、正常に VLAN 情報が学習できなくなります。GVRP を利用する際の最大 VLAN 数は、100 です。
- GVRP プロトコルを利用し、動的にポートの追加が行われた場合、nsm または hsl プロセスが異常終了することがあります。

4.26 スパニングツリープロトコル

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「L2 スイッチング」 / 「スパニングツリープロトコル」


- チャンネルグループを作成後に MSTP を有効にすると、FDB に学習した MAC アドレスがケーブルがリンクダウンしてもクリアされません。チャンネルグループを作成する前に MSTP を有効にしてください。
- VCS と PIM-SM を併用している時、リポートローリングを行うと 20 秒程度のマルチキャストトラフィックの通信断が発生します。

4.27 イーサネットリングプロテクション (EPSR)

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「L2 スイッチング」 / 「イーサネットリングプロテクション」


- EPSR と GVRP の併用は未サポートになります。
- EPSR とトンネルインターフェースの併用は未サポートになります。
- EPSR 内のリンクダウンが発生した機器が、マスターからのリンクダウンパケットを受け取っても FDB 情報をクリアしない場合があります。また、リンクダウンが発生した機器は本来であれば FDB の全クリアする必要がありますが、該当ポートの FDB はリンクダウンによってクリアされるため、通信に影響はありません。

4.28 DHCP Snooping

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「L2 スイッチング」 / 「DHCP Snooping」


- snmp-server enable trap コマンドで DHCP Snooping 関連のトラップを有効に設定しているとき、ip dhcp snooping violation コマンドでトラップを設定しようとすると、「SNMP trap for DHCP Snooping is disabled」というメッセージが表示され、トラップの設定が有効になりません。トラップを設定する場合は、ip dhcp snooping violation コマンド、snmp-server enable trap コマンドの順に入力してください。また、上記のエラーメッセージが表示された場合は、再度 snmp-server enable trap コマンドを入力することで、トラップの設定が有効になります。
- ip dhcp snooping agent-option allow-untrusted コマンドを実行し、リレーエージェント情報オプション (オプションコード 82) を含む DHCP パケットの Untrusted ポートでの受信を有効 (破棄しない) に設定しても、リレーエージェント情報オプションを含む DHCP パケットが破棄されます。

4.29 IP ルーティング

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」

ループバックインターフェースに IP アドレスを設定した時、ループバックインターフェース宛のルートエントリーがハードウェアテーブルに登録されません。

4.30 経路制御

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「経路制御」**


- maximum-paths コマンドを設定して、コストパスの最大値を変更しても有効になりません。
- デフォルト経路を登録しているにもかかわらず、show ip route database コマンドで「Gateway of last resort is not set」と表示される場合がありますが、表示だけの問題で通信には影響ありません。
- IP 経路が 20 エントリー以上登録されていると、デフォルト経路を登録しているにもかかわらず、show ip route コマンドで「Gateway of last resort is not set」と表示される場合がありますが、表示だけの問題で通信には影響ありません。

4.31 RIP (x510 シリーズのみ)

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「経路制御 (RIP)」**

- RIP 認証機能において、複数のパスワード（キーチェーン）を設定した時、送信される RIP パケットの中に含まれるパスワードは、1 番目に設定したパスワードのみになります。
- 機器の持つ RIP インターフェースが含まれ、サブネットマスクの異なる経路を受信した場合、その経路をダイナミック登録しません。スタティック登録してください。


4.32 OSPF (x510 シリーズのみ)

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「経路制御 (OSPF)」**

- 2 つのルーターの各々に同じ送信先アドレスとネクストホップを持つスタティックルートを設定し、External LSA の Forwarding address が Non-Zero になる設定をしたとき、優先度の低い（router ID の低い値を持つ）ルーターがグレースフルリスタートをさせると、優先度の低いルーターからの External LSA を登録してしまいます。不正な AS External LSA の情報を元にルート情報が作成されますが、経路は登録されているので通信は可能です。
- VRRP が動作する機器は、OSPF のエリア境界ルーター（ABR）に設定することはできません。
ABR でグレースフルリスタートが発生した後、隣接関係をダウンさせると、隣接関係を保持していたサブネットのサマリー LSA が削除されます。
- OSPF において、代表ルーター（DR）として動作している時に clear ip ospf process コマンドを入力すると、隣接ルーターが DR に変更されます。
- OSPF 使用時、グレースフルリスタート後や VCS のマスター切り替え後に show ip ospf route コマンドを実行すると、インターフェース経路の種別が通常の「C (Connected)」ではなく「O (OSPF)」と表示されます。これは表示だけの問題であり、通信には影響ありません。また、インターフェースのダウンや OSPF プロセスの再起動によって解消されます。

- OSPF の経路フィルタリングにおいて、match metric コマンドを使った特定経路の破棄ができません。
- OSPF で完全スタブエリア (area stub no-summary) に指定すると、本来そのエリア内にはデフォルトルートのみを通知するべきですが、各エリアへのルート情報 (タイプ 3LSA) が通知されてしまいます。

4.33 ARP

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「ARP」**

マルチキャスト MAC アドレスをもつスタティック ARP エントリーを作成した後、それを削除してから arp-mac-disparity コマンドを有効にして、同一のエントリーをダイナミックに再学習させる場合は、設定後にコンフィグを保存して再起動してください。

4.34 VRRP

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「VRRP」**


- VRRP において、バーチャル IP アドレスと同一ネットワークからの通信に対しては応答しますが、別のネットワークから自身のバーチャル IP アドレス宛での通信には応答しません。
- VRRP を使用していない装置では VRRP トラップを有効にしないでください。VRRP トラップの有効化・無効化は、snmp-server enable trap コマンドの vrrp オプションで行います。初期設定は無効です。

4.35 IPv6 ルーティング

 **「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」**


- IPv6 アドレスを設定する際、不正なインターフェース ID が指定されてもエラーになりません。
- 自身の IPv6 アドレス宛に ping を実行するとエラーメッセージが表示されます。
- IPv6 において、インターフェース経路 (直接経路) が 2 重に登録されることがあります。
- IPv6 において、VLAN が削除されたとき、リンクローカルアドレスが IPv6 転送表から消えません。
- ICMPv6 の宛先マルチキャストアドレスが MTU よりも大きい場合、Packet Too Big メッセージを出力しないため 正しく IPv6 経路 MTU 探索ができません。
- フラグメントされた IPv6 Echo Request は利用できません。利用した場合 Duplicate パケットは正しく再構築されませんのでご注意ください。

4.36 6to4 トンネリング (x510 シリーズのみ)

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」 / 「IPv6 インターフェース」

- 6to4 のトンネリングが確立している状態で DSCP 値をダイナミックに変更すると、その後トンネリングの確立に失敗します。DSCP 値を変更する場合は、変更後の設定を保存後、機器を再起動してください。
- 6to4 トンネリングパケットの外側ヘッダーに TTL 値を指定すると、トラフィックが流れなくなります。
- 6to4 トンネリングの設定をすると、以下のエラーログが表示されることがありますが、通信に影響はありません。
Parse error for message Link Up ret=-1
- 6to4 トンネリングにおいて、対象トンネルインターフェース経由で送信するパケットの外側ヘッダーの始点アドレス (IPv4 アドレス) の設定を削除して、もう一度追加する場合は、機器を再起動してください。

4.37 OSPFv3 (x510 シリーズのみ)

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」 / 「経路制御 (OSPFv3)」

- 動作中の機器に OSPFv3 の設定をした場合、OSPFv3 が動作する VLAN インターフェースが一度リンクアップしないと、show ipv6 ospf interface コマンドで、OSPFv3 インターフェースの情報が表示されません。設定後は、機器を再起動するか、VLAN インターフェースの所属ポートをリンクアップさせてください。
- OSPFv3 使用時、passive-interface コマンドで指定するパッシブインターフェースには、実在するインターフェースのみを指定してください。
- OSPFv3 Authentication の設定を変更した場合は、設定を保存後、再起動してください。
- OSPFv3 で仮想リンクを使用している場合、グレースフルリスタートは未サポートです。

4.38 近隣探索

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」 / 「近隣探索」

イベントログ上に「Neighbor discovery has timed out on link eth1->5」のログメッセージが不要に表示されることがあります。これは表示上の問題であり通信には影響はありません。

4.39 PIM (x510 シリーズのみ)

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IP マルチキャスト」 / 「PIM」

- PIM-DMv4 インターフェースをサポートリミット値まで設定した後、VLAN インターフェースから PIM-DMv4 の設定を削除し、別の VLAN インターフェースに PIM-DMv4

を設定しようとする、下記のエラーが出力され、設定ができません。その場合は、設定を保存してから再起動してください。

% Maximum number of pim-dm interfaces reached

- PIM-SSM の範囲外のマルチキャストアドレスを受信しても破棄しません。
- PIM-DM インターフェースをすべて無効化しても、IP マルチキャスト経路表の Upstream エントリーがすぐに削除されませんが、通信には影響ありません。また、該当エントリーはエージアウトによって削除されます。
- PIM の (*,G) エントリーは、IGMP グループ登録数のサポートリミット -1 の値までしか登録できません。

4.40 IGMP

【コマンドリファレンス】 / 【IP マルチキャスト】 / 【IGMP】

- ip igmp static-group コマンドで source パラメーターを指定しても、指定した送信元 IP アドレス以外からのマルチキャストパケットも指定したポートにだけ送信してしまいず。
- show ip igmp groups コマンドの表示結果に、IGMP を有効に設定していない VLAN が表示されることがあります。これは show ip igmp groups コマンドの表示だけの問題であり、動作に影響はありません。
- IGMP プロキシにおいて、下流インターフェースに指定している VLAN を無効にしても、上流インターフェースにグループ情報が残り続けます。
- スタティックマルチキャストグループが登録されている状態で、該当のマルチキャストグループと同じグループアドレス宛での Join メッセージを他のポートから受信すると、その後 Leave メッセージを受信しても、そのポートには該当マルチキャストグループ宛のマルチキャストパケットが転送されるようになります。
- マルチキャストグループをスタティックに登録した後、登録したインターフェースにスタティックに登録してあるものと同じマルチキャストグループの参加、離脱が発生すると、マルチキャストグループがコンフィグから削除しても消せなくなります。この場合は、マルチキャストグループにメンバーが参加した状態で ip igmp static-group コマンドを no 形式で実行するか、IGMP 機能を一旦無効にし、再度有効にすると、マルチキャストグループは正常に削除されます。


4.41 IGMP Snooping

【コマンドリファレンス】 / 【IP マルチキャスト】 / 【IGMP Snooping】

- 空の Exclude リストを持つグループレコードが存在している状態で、同グループに対する Exclude リスト追加要求 (BLOCK_OLD_SOURCES) を受信すると、それ以降該当グループがタイムアウトしたり、脱退メッセージ (CHANGE_TO_INCLUDE()) を受信したりしても、該当グループが正しく削除されません。

- IGMP Snooping が有効な状態で、一旦無効にし、再度有効にした場合、その後に受信する IGMP Report を全ポートにフラッディングします。
IGMP Snooping を再度有効にした後、`clear ip igmp group` コマンドを実行して全てのエントリーを消去することで回避できます。
- Include リスト（送信元指定）付きのグループレコードが登録されている状態で、あるポートに接続された唯一のメンバーからグループ脱退要求を受信すると、そのポートには該当グループのマルチキャストトラフィックが転送されなくなりますが、他のポートで同じグループへの参加要求を受信すると、脱退要求によって転送のとまっていたポートでもマルチキャストの転送が再開されてしまいます（この転送は、脱退要求を受信したポートの Port Member list タイマーが満了するまで続きます）。
- VLAN ID のみ異なる、未登録の IP マルチキャストトラフィックをタグ付きポートで受信すると、該当マルチキャストトラフィックは、受信ポートが所属するすべての VLAN でフラッディングされます。ただし、各 VLAN で該当マルチキャストグループのメンバーが登録されると、IGMP Snooping が正常に動作するようになり、フラッディングは行われなくなります。
- IGMP Snooping をいったん無効にし、再度有効にする場合は、システムを再起動してください。
- ダイナミック登録されたルーターポートを改めてスタティックに設定した場合、ダイナミック登録されてから一定時間が経過すると設定が削除されます。また、一定時間が経過するまでの間、コンフィグ上にはスタティック設定が表示されますが、`ip igmp snooping mrouter interface` コマンドを `no` 形式で実行しても、コンフィグから削除することができません。
ルーターポートをスタティックに設定する場合は、該当のポートがダイナミック登録されていないことを確認してください。
- グローバルコンフィグモードの `ip igmp snooping` コマンド、インターフェースモードの `ip igmp snooping` コマンドのどちらか一方のみが実行されている状態では、不要なパケットが複製され出力されます。
- IGMP Snooping の設定を無効で起動した場合、有効に変更しても、IGMP パケットが正しく転送されません。IGMP Snooping を無効から有効に設定変更した場合は、設定を保存し再起動してください。


4.42 PIM (x510 シリーズのみ)

 **参照**「コマンドリファレンス」/「IPv6 マルチキャスト」/「PIM」

- PIMv6 使用時、PIMv6 インターフェースが最大まで設定されているとき、それらの VLAN の一つを削除しても、新たに VLAN インターフェースに PIMv6 を設定することができません。
VLAN インターフェースから PIMv6 の設定を削除してから、VLAN を削除してください。
- VRRPv3 と PIM-SMv6 は併用できません。


- ipv6 pim ext-srcs-directly-connected コマンドは未サポートです。

4.43 MLD

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 マルチキャスト」 / 「MLD」


- MLDv2 において、グループエントリーがスタティック登録されている状態で、同じグループがダイナミックに登録され、待機時間が経過した時、ダイナミック登録されたエントリーとともに、スタティック登録されたエントリーもコンフィグから削除されます。
- clear ipv6 mld コマンド実行時に「% No such Group-Rec found」というエラーメッセージが表示されることがありますが、コマンドの動作には問題ありません。
- MLD パケットの Max Query Response Time フィールドの値が、本製品の設定の 1/100 の数値で送出されます。MLD をお使いの際は、ipv6 mld query-max-response-time コマンドでなるべく大きい値（最大値は 240）を設定してください。
- MLDv2 インターフェースにおいて、終点 IPv6 アドレスがマルチキャストアドレスの MLDv1 Report は受信しますが、終点 IPv6 アドレスが MLDv2 インターフェースのユニキャストアドレスになっている MLDv1 Report は受信せずに破棄します。

4.44 MLD Snooping

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 マルチキャスト」 / 「MLD Snooping」

- グローバルコンフィグモードの ipv6 mld snooping コマンド、インターフェースモードの ipv6 mld snooping コマンドのどちらか一方のみが実行されている状態では、不要なパケットが複製され出力されます。
- MLD Snooping の設定を無効で起動した場合、有効に変更しても、MLD パケットが正しく転送されません。MLD Snooping を無効から有効に設定変更した場合は、設定を保存し再起動してください。
- MLD Snooping の Report 抑制機能が有効なとき（初期設定は有効）、ルーターポートで受信した MLDv1 Report または Done メッセージを受信ポートから再送出してしまいます。これを回避するには、「no ipv6 mld snooping report-suppression」で Report 抑制機能を無効化してください。
- MLD Snooping をいったん無効にし、再度有効にする場合は、システムを再起動してください。
- MLD Snooping 有効時、ルーターポートで MLD Report を受信した場合に、同ポートから該当 MLD Report を再送信することがあります。

4.45 アクセスリスト

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「トラフィック制御」 / 「アクセスリスト」

- ntp access-group コマンドによって NTP サービスに対するアクセス制御の設定を行う場合、ホストを許可（permit）する形式で標準 IP アクセスリストを作成していると、エ


ントリーにマッチするホストのみでなく、マッチしないホストも時刻の同期を行うことができてしまいます。

標準 IP アクセスリストを作成する際、許可するホストを指定したあとに、すべてを拒否 (deny any) するエントリーを追加してください。

- ARP や IGMP など CPU で処理されるパケットに対してイングレスフィルタが正しく動作しません。
ARP に関しては、以下の設定でフィルタすることが可能です。


```
mls qos enable
access-list 4000 deny any any vlan 100
class-map class1
match access-group 4000
policy-map policy1
class default
class class1
interface port2.0.24
service-policy input policy1
```

4.46 ハードウェアパケットフィルタ

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「トラフィック制御」](#) / [「ハードウェアパケットフィルタ」](#)

IGMP パケットはハードウェアパケットフィルタでフィルタリングできません。

4.47 Quality of Service


 [「コマンドリファレンス」](#) / [「トラフィック制御」](#) / [「Quality of Service」](#)

- ポリシーベースルーティングのネクストホップの最大登録数は 127 件です。
- QoS の match eth-format protocol コマンドで AppleTalk パケットを制御できません。
- match dscp コマンドの設定を削除する際、no match dscp と入力するとエラーとなります。
no match ip-dscp コマンドを入力することで、設定を削除できます。
- wrr-queue disable queue コマンドを設定している状態で no mls qos コマンドにより QoS 自体を無効にする場合は、先に no wrr-queue disable queue を実行してください。
- QoS の送信スケジューリング方式 (PQ、WRR) が混在するポートを手動設定のトランクグループ (スタティックチャンネルグループ) に設定した場合、ポート間の送信スケジューリングが正しく同期されません。トランクグループを設定した場合は、個々のポートに同じ送信スケジューリング方式を設定しなおしてください。
- mls qos map cos-queue コマンドで cos-queue マップを変更していても、マルチキャストパケットの CPU 宛て送信キューが、デフォルトの cos-queue マップにしたがって決定される場合があります。これらのマルチキャストパケットを任意の CPU 宛て送信キューに振り分けるには、remark new-cos コマンドを使って該当パケットの内部 CoS

値を書き換えてください。その際、該当パケットに対しては、デフォルトの cos-queue マップが適用されることにご注意ください。

- 受信レート検出 (QoS ストームプロテクション) 機能の storm-action コマンドの初期値に portdisable が設定されています。
- ポリサーのアクションを drop-red に設定する場合は、MINBURST、MAXBURST の合計を 40960 以上に設定してください。
- QoS ストームプロテクションの linkdown アクションを解除するときは、switchport enable vlan コマンドではなく「no shutdown」を使ってください。

4.48 DNS リレー

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IP 付加機能」 / 「DNS リレー」

DNS のキャッシュサイズまたはタイムアウトの設定を変更すると、IPv6 DNS キャッシュエントリが削除されます。

4.49 DHCP リレー

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IP 付加機能」 / 「DHCP リレー」

- セカンダリー IP アドレスを設定したインターフェースで DHCP リレーを有効にした場合、セカンダリー IP アドレスが優先的に使用されます。
- DHCPv6 リレー機能使用時、IA_PD プレフィックスオプションを含む DHCPv6 リレーパケットを受信しても、同オプションに含まれるプレフィックスへの経路が登録されません。

4.50 DHCPv6 サーバー

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IP 付加機能」 / 「DHCPv6 サーバー」

DHCPv6 サーバー機能において、動的に割り当てるアドレスの最終有効時間が infinite (無期限) の場合、IPv6 アドレスを配布しても、show コマンドに反映されません。


4.51 Ping ボーリング

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IP 付加機能」 / 「Ping ボーリング」

Ping ボーリング機能を一旦無効化してから再度有効化すると、プロセス終了を示す以下のようなログが表示されますが、動作に問題はありません。

```
init: network/ping-poll main process (13750) killed by HUP signal
```

4.52 アライドテレシスマネージメントフレームワーク (AMF)

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「アライドテレシスマネージメントフレームワーク」

- AMF クロスリンク、EPSR、VCS を使用した構成で、VCS メンバーがダウンし、復旧した際、復旧した VCS メンバーに接続されている AMF ノードが認識されません。EPSR リング内では、AMF Node Depth 値が異なる AMF ノード同士は AMF リンクで接続してください。

- VCS 構成において、スタックリンクに障害が発生し VCS メンバーが Disabled Master 状態になると、スタックリンクとレジリエンシーリンク以外のポートは無効化されますが、EPSR を併用している場合、show atmf nodes コマンドの結果には、Disabled Master 状態となり無効化されたポートに接続された AMF ノードが表示されてしまいます。
EPSR リング内では、AMF マスターからの距離（ホップ数）の異なる AMF ノード同士は、AMF クロスリンクではなく AMF リンクで接続してください。

- AMF リンクとして使用しているスタティックチャンネルグループの設定や構成を変更する場合は、次に示す手順 A・B のいずれかにしてください。

[手順 A]

1. 該当スタティックチャンネルグループに対して shutdown を実行する。
2. 設定や構成を変更する。
3. 該当スタティックチャンネルグループに対して no shutdown を実行する。

[手順 B]

1. 該当ノード・対向ノードの該当スタティックチャンネルグループに対して no switchport atmf-link を実行する。
2. 設定や構成を変更する。
3. 該当ノード・対向ノードの該当スタティックチャンネルグループに対して switchport atmf-link を実行する。

- リポートローリング機能でファームウェアバージョンを A から B に更新する場合、すでに対象ノードのフラッシュメモリ上にバージョン B のファームウェアイメージファイルが存在していると、ファームウェアの更新に失敗します。このような場合は、対象ノードから該当するファームウェアイメージファイルを削除してください。

- AMF で使用するホスト名の最大文字数は 62 文字です。

- AMF ネットワークにおいて、デバイスのホスト名は重複しないようにつけてください。大文字・小文字は区別できません。

- AMF マスター上で atmf recover コマンドによってメンバーノードの内蔵フラッシュメモリの復元を実行した場合、復元が完了しても、マスターノード上で完了を示すメッセージが出力されません。復元の完了は、対象ノードにおけるログ出力によって確認できます。

- インターフェースに以下の手順で AMF 設定を行うと、show atmf links コマンドの ATMF State が Incompatible となります。ATMF State が Incompatible になった場合、インターフェースをダウン・アップさせると正しく表示されます。

- 1 AMF 設定
- 2 AMF 設定解除
- 3 スタティックチャンネルグループ設定
- 4 上記スタティックへ AMF 設定

- VCS と AMF を併用している環境で、VCS バックアップメンバーが加入直後に、AMF マスターから atmf working-set コマンドを実行すると x510 配下の機器がワーキング

セットグループに加入できません。VCS バックアップメンバーが加入後に `atmf working-set` コマンドを実行する場合は、一分以上経過してからにしてください。

- AMF 機能が内部的に使用するドメイン VLAN の ID を変更していた際、オートリカバリー機能が正常に動作しません。
- AMF クロスリンクに指定されたインターフェースをいったん無効化し、その後、再度有効化して AMF ネットワークを構築すると、いくつかの AMF ノードがマスターの離脱を検出できなかつたり、AMF ノードが孤立したりすることがあります。
- AMF 自動検出メカニズムでノードを追加した時および、オートリカバリーを実施した際に、下記のエラーログが残りますが、動作への影響はありません。
 - ・ 2013 Sep 4 11:52:37 user.err awplus HSL[776]: HSL: ERROR: Could not create L3 interface in hardware for interface vlan4090 4390 ret(-4)
 - ・ 2013 Sep 4 11:52:37 user.err awplus HSL[776]: HSL: ERROR: Interface vlan4090(4390) doesn't have a corresponding Broadcom interface structure
- AMF ネットワーク上では、すべての経路上で MTU が 1500 以上になるようにしてください。AMF パケットにはフラグメント不可 (DF) フラグがセットされているため、AMF ネットワーク上に AMF パケットのサイズ (最大 1500 バイト) よりも MTU の小さい箇所があると、該当 AMF パケットが正常に転送されません。
- 複数の AMF ノードを対象とするワーキングセットプロンプトで `show tech-support` コマンドを実行した場合、ファイルに出力される情報が本来よりも少なくなることがあります。

4.53 パーチャルシャーシスタック (VCS)

参照 「コマンドリファレンス」 / 「パーチャルシャーシスタック」

- VCS バックアップメンバーが再加入中にコンフィグを変更すると、再加入したバックアップメンバーにコンフィグが反映されないことがあります。バックアップメンバーが加入中に設定の変更はしないでください。
- まれに VCS マスター切り替え後の新マスターが、設定されているプライオリティー値に従わずに選定されることがあります。
- VCS スレーブを交換する際、マスターとスタックケーブルで接続して電源をオンにした後、通常、スタック ID を変更し、AMF を有効に設定するため、2 回の再起動が必要になります。AMF ネットワークに所属後、コンフィグの同期に時間がかかり、コンフィグの同期後に以下のようなエラーメッセージが表示され、もう一度再起動を要求されません。
 - ・ Post startup check found the following errors:
 - ・ Processes not ready:
 - ・ authd bgpd epsrd irdpd lacpd llcpcd mstpcd ospf6d ospfd pdmd pim6d pimd ripd ripngd rmond sflowd vrrpd
 - ・ Timed out after 300 seconds
 - ・ Bootup failed, rebooting in 3 seconds.


- ・ Do you wish to cancel the reboot? (y) :
- LDF が検出され link-down アクションが実行されている間にループを解消し、VCS マスター切り替えが発生すると、LDF 検出時アクションが実行されたポートが設定時間経過後も復旧しません。
該当のポートにて shutdown コマンドを no 形式で実行すると、リンクが復旧します。
- VCS と EPSR を併用する場合、reboot rolling コマンドを実行した際に約 1 分程度の通信断が発生する場合があります。
- マスター切り替えが発生したとき、「Failed to delete 'manager」というメッセージが表示されることがあります。これは表示だけの問題で動作には影響しません。
- VCS 構成時、EPSR と IGMP を併用している場合、IGMP タイマーは初期値より短く設定しないでください。
- VCS 構成時は PIM と RSTP を併用できません。
- VCS グループのファームウェア自動同期は 2 台構成時のみサポートとなります。3 台以上で VCS を構成する場合は手動で同じファームウェアバージョンにそろえてください。
- 同一ネットワーク上に複数の VCS グループが存在する場合は、バーチャル MAC アドレスの下位 12 ビットとして使用されるバーチャルシャーシ ID を、該当する VCS グループ間で重複しないように設定してください。バーチャルシャーシ ID の設定は、stack virtual-chassis-id コマンドで行います。また、VCS グループのバーチャルシャーシ ID は、show stack コマンドを detail オプション付きで実行したときに表示される「Virtual Chassis ID」欄で確認できます。
- VCS 構成において、6to4 トンネリング使用中ローリングリブートを実施するとパケットが重複して送出されます。
- VCS マスターにログインしている状態からスレープにリモートログインし、スレープ上で、show users コマンドを実行しても、VCS マスターのコンソールログインの情報が表示されないことがあります。一度、コンソールからログアウトすると正しく表示されるようになります。
- VCS 構成においてログを出力しない再起動、またはカーネルリブートが発生した後、新規マスターの全ポートのリンクダウン・アップが一時的に発生します。
- VCS 構成において HSL プロセスが異常終了した場合、新規マスターの全ポートのリンクダウン・アップが発生します。
- VCS 構成時に uddl aggressive-mode コマンドを設定する場合は、全ポートに設定せず、必要なポートにのみ設定してください。全ポートに設定している場合、VCS メンバーのいずれかが再起動すると、該当メンバーのレジリエンシーリンクを除く全ポートでアグレッシブモードが解除されます（ランニングコンフィグには no uddl aggressive-mode という設定が追加されます）。
- VCS と RSTP の併用時に reboot rolling を実行すると、通常よりも通信復旧に時間がかかる場合があります。

- VCS 構成時、スレーブに接続したコンソールターミナルからの CLI ログイン時には、TACACS+ サーバーを用いたログイン認証ができません。ユーザー認証データベースによる認証は可能です。
- EPSR のトランジットノードで VCS のローリングリポートを行った場合、10 秒程度の通信断が発生することがあります。
- 4 台の VCS 構成において、リポートローリングを実行すると VCS メンバーが加入するときに、まれに加入したメンバーの内 1 台が再起動することがありますが再起動後は正常に VCS を構成し、動作します。

5 マニュアルの補足・誤記訂正


最新マニュアル（取扱説明書、コマンドリファレンス）の補足事項および誤記訂正です。

5.1 Power over Ethernet

 **参照** 「CentreCOM x510 シリーズ 取扱説明書」 (Rev.C) 44～45 ページ

取扱説明書 (Rev.C) の 44～45 ページに power-inline max コマンド（インターフェースモード）の記述がありますが、同コマンドはサポート対象外のため使用しないでください。

5.2 VCS グループの構成

 **参照** 「AT-x510DP-52GTX/AT-IX5-28GPX 取扱説明書」 (Rev.A)

21 ページ、53 ページ

取扱説明書 (Rev.A) において、VCS グループ構成の説明に誤りがありましたので、下記のとおり訂正いたします。


誤：

VCS グループは同一機種のみで構成されるようにしてください。AT-x510DP-52GTX と AT-IX5-28GPX との混在や、他の VCS サポート製品との混在はできません。

正：

VCS グループは x510 シリーズ（AT-x510DP-52GTX を含む）のみ、または AT-IX5-28GPX 同士で構成されるようにしてください。x510 シリーズと AT-IX5-28GPX との混在や、他の VCS サポート製品との混在はできません。

5.3 定格入力電流値

 **参照** 「AT-x510DP-52GTX/AT-IX5-28GPX 取扱説明書」 (Rev.A)

84 ページ

取扱説明書 (Rev.A) において、AT-PWR800-70/AT-PWR250-70 の定格入力電流値に誤りがありましたので、下記のとおり訂正いたします。

誤：


AT-PWR800-70 : 12A
AT-PWR250-70 : 3.0A

正：

AT-PWR800-70 : 10A


AT-PWR250-70 : 5.0A

5.4 ログ

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「運用・管理」](#) / [「ログ」](#)


VLAN またはポートインターフェースでリンクダウン / リンクアップが起きた際に出力されるログのログレベルは「notice/5」です。

5.5 ループガード (LDF 検出)

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「インターフェース」](#) / [「スイッチポート」](#)

ファームウェアバージョン **5.4.3-0.1** のリリースノート (Rev.B) には、「LACP と LDF 検出は併用できません」とありますが、LACP と LDF 検出は問題なく併用できます。


5.6 電源ユニットの抜き差しについて

 [「AT-x510DP-52GTX/AT-IX5-28GPX 取扱説明書」](#) (Rev.A) 39 ページ

電源ユニットを抜き差しする場合は、必ず抜き差しする電源ユニットの電源をオフにしてください。また、電源ユニットを抜き差しする場合は、電源ユニット LED が完全に消灯したことを確認してから、再度取り付けるようにしてください。


5.7 SecureUSB メモリー使用時の注意事項

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「運用・管理」](#) / [「システム」](#)

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「運用・管理」](#) / [「ファイル操作」](#)

- Apricorn 社の SecureUSB メモリー ASK-256-8GB/16GB/32GB を装着している状態でシステムを再起動した場合、再起動時 SecureUSB メモリーの仕様によりロックがかかります。USB 内のファームウェアファイルを起動用ファームウェアに指定して、再起動しないでください。
- Apricorn 社の SecureUSB メモリー ASK-256-8GB/16GB/32GB をロックがかかったまま本製品に挿入すると、デバイス認識のリトライと失敗を繰り返すログが約 3 分間出続けますが、正常なものです。

5.8 802.1X 認証と Web 認証の併用時の動作

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「インターフェース」](#) / [「ポート認証」](#)

2 ステップ認証のサポートにより、802.1X 認証と Web 認証を併用する場合の動作が v5.4.3-3.7 から変更になりました。


・ v5.4.3-2.5 以前の動作

802.1X 認証と Web 認証併用時は、802.1X で認証に失敗すると認証プロセスが完了となっていました。

・ v5.4.3-3.7 以降の動作


802.1X 認証と Web 認証併用時は、802.1X で認証に失敗すると Web 認証に移行し、Web 認証でも認証に失敗すると認証プロセスが完了になります。

5.9 スパニングツリープロトコル

 [\[コマンドリファレンス\]](#) / [\[L2スイッチング\]](#) / [\[スパニングツリープロトコル\]](#)


片方向通信中に STP でトポロジーチェンジが発生した場合、宛先 MAC アドレスがエーリアウトしない場合があります。片方向通信のみの環境では、RSTP または MSTP を使用してください。

5.10 フォワーディングデータベース

 [\[コマンドリファレンス\]](#) / [\[L2スイッチング\]](#) / [\[フォワーディングデータベース\]](#)

登録されている MAC アドレス宛へ通信を転送している場合、エージングタイム経過後も該当アドレスが MAC テーブルから削除されません。

5.11 IGMP Snooping

 [\[コマンドリファレンス\]](#) / [\[IP マルチキャスト\]](#) / [\[IGMP Snooping\]](#)

platform stop-unreg-mc-flooding コマンドが有効な状態で VCS マスター切り替えが発生すると、無効の状態の時と比較しマルチキャストの無通信時間が長くなります。

6 サポートリミット一覧

パフォーマンス	
VLAN 登録数	単体：4094 VCS：2000※1
MAC アドレス (FDB) 登録数	単体：16K VCS：4K※2
IPv4 ホスト (ARP) 登録数	単体：2K VCS：768※3
IPv4 ルート登録数	1K※4
リンクアグリゲーション	
グループ数 (筐体あたり)	128※5
ポート数 (グループあたり)	8
ハードウェアパケットフィルタ	
登録数	240※6※7※8
認証端末数	
認証端末数 (ポートあたり)	1K
認証端末数 (装置あたり)	1K
マルチプルダイナミック VLAN (ポートあたり)	1K
マルチプルダイナミック VLAN (装置あたり)	1K
ローカル RADIUS サーバー	
ユーザー登録数	100
RADIUS クライアント (NAS) 登録数	24
その他	
VRP-Lite インターフェース数	-
IPv4 マルチキャストルーティングインターフェース数	31

※ 表中では、K=1024

※1 VCS 構成時、VCS グループに設定する VLAN の数は 2000 個までをサポートします。

※2 VCS 構成時、フォワーディングデータベース (FDB) のエントリー数は 4K 個までサポートします。

※3 VCS 構成時、IPv4 ホスト登録数 (ARP エントリー数) は最大で 768 個までサポートします。

※4 インターフェース経路、スタティック経路、ダイナミック経路など、各種経路情報を含めた登録数です。

※5 スタティックチャンネルグループは 96 グループ、LACP は 32 グループ設定可能。合わせて 128 グループをサポートします。

※6 アクセスリストのエントリー数を示します。

※7 1 ポートにのみ設定した場合の最大数。エントリーの消費量はルール数やポート数に依存します。

※8 ユーザー設定とは別に、アクセスリストを使用する機能を有効化した場合に消費されるエントリーを含みます。

7 未サポート機能 (コマンド)

最新のコマンドリファレンスに記載されていない機能、コマンドはサポート対象外ですので、あらかじめご了承ください。最新マニュアルの入手先については、次節「最新マニュアルについて」をご覧ください。

8 最新マニュアルについて

最新の取扱説明書「CentreCOM x510 シリーズ 取扱説明書」(613-001684 Rev.C)、「AT-x510DP-52GTX/AT-IX5-28GPX 取扱説明書」(613-001836 Rev.A)、コマンドリファレンス「CentreCOM x510 シリーズ コマンドリファレンス」(613-001763 Rev.F) は弊社ホームページに掲載されています。

なお、VCS の設定、運用に関する情報は、別紙「CentreCOM x510 シリーズ VCS 設定 / 運用マニュアル」に掲載していましたが、「CentreCOM x510 シリーズ コマンドリファレンス」(613-001763 Rev.B) 以降、コマンドリファレンスに合わせて掲載しております。

本リリースノートは、これらの最新マニュアルに対応した内容になっていますので、お手持ちのマニュアルが上記のものでない場合は、弊社ホームページで最新の情報をご覧ください。

<http://www.allied-telesis.co.jp/>